

## 巻頭言

### 50年史編纂に当たって



学長 岡田 晃

イギリスの歴史家トーマス・カーライルは、「現在というものは過去のすべての生きた集大成である」と述べているが、過去とはまさに動かすことのできないものであり、また、過去のほかに確かなものはないといわれている。現在の金沢大学にしても、開学以来、いやそれ以前からの様々な長い時間における確かな歩みの集大成の結果として現出されているのである。そして我々はまた、その歴史をつくることに参加しているのであって、これがまた未来へと力強く引き継がれていくのである。金沢大学も平成11年には創立50周年を迎えることになるが、その歴史的な記録はこれまで“10年史”としてしかまとめられていなかった。その“10年史”は、初代の戸田正三学長の「金沢大学は12年前、既に国立第8大学として出発すべきであったが、その機会を逸して、10年前、全国一様の70の新制国立大学の1校として出発した」という文ではじまっている。明治44年、第27回帝国議会上に「北陸帝国大学設立に関する建議案」が提出され、また、戦後の昭和20年12月にも石川通常議会において

北陸総合大学誘致に関する意見の開陳があり、当時の伊藤知事は金沢市が官立総合大学設置の好適地であるとして、そのことを要望している。

城内に金沢大学があった頃、その象徴としての存在であった金沢城石川門は、宝暦9年(1759)に消失したが、のち岡田太郎右衛門(もちろん私の先祖ではない)らによって再建計画が進められ、天明8年(1788)に完成をみたのであるが、この門に別れを告げて角間に移転してから既に2年が過ぎていった。

私は昭和24年に総合大学として創立されたこの金沢大学の医学部進学課程のはじめての学生として入学した。当時の入学試験の受験資格は、旧制高等学校の1年修了以上であり、私は既に卒業(3年で卒業)していたが、旧制大学の入試に失敗し、遅れて発足した新制大学第1回の入試を受験して入学することができたのだ。次の年に、旧制大学最後の入試が行われることになっていたが、いわゆる白線浪人救済のために、新制大学に在籍のまま入試を受けることができるという恩典があったので、在籍しながらもつばら図書館へ通って受験勉強に専念した。下宿は十間町に有り、時々黒門を通して、木造の兵舎を改造した校舎に講義を聞くために向かったりもした。城内には兵舎を改良した学生寮もあったが、押入の中を占拠して、次の年の受験に備えている人も居た。大学祭を楽しんだ記憶は鮮明に残っている。

本学の歴史に関しては“10年史”しかないだけに、これまでを振り返り、それぞれの記憶や思い出をも歴史としてとどめ、そして将来を展望できるように“50年史”を編纂することこそ、当面する金沢大学の最も重要な仕事なのである。

## 開学の頃の社会情勢

昭和24年4月

### 女性の地位向上?

香林坊街頭インタビューでの一コマ。「家庭での御主人のサービスはどうですか」という質問に対してある御婦人、「うちの主人はあんまりです」と夫への不満が噴出。  
(『北國毎日新聞』四月七日より要約)

婦人のための街頭相談所も設けられ、金沢にも女性の声が・

### 岩波新書の再出版

戦時中に中絶されていた岩波新書(青版)が再発刊された。大塚金之助『解放思想史の人々』や清水幾太郎『ジャーナリズム』等々。  
(『朝日新聞』四月二四日より要約)

言論の自由が、少しずつ回復されていく一過程。

### たばこの販売増加

この年、たばこの生産が戦前の最高程度に回復した。品質も少しずつ改善され、新パイプたばこ百円の「日光」や太巻三円の「新生バット」等も品目に加えられた。  
(『朝日新聞』四月二七日より要約)

オールドファンには、懐かしい逸品。

## 50年史編纂委員会 委員から



創立50周年記念事業  
企画委員会委員長

江見 準  
(工学部長)

### 50年史編纂の重み

金沢大学は平成11(1999)年に創立50周年を迎える。本学では昨年6月に創立50周年記念事業委員会が発足し、その下に設置された事業企画委員会において、記念事業として、50年史編纂、記念行事、地域交流事業を行うことを決め、それぞれに対して実施委員会が組織された。とりわけ50年史の編纂作業は、資料蒐集と執筆に十分な期間を必要とするので、橋本哲哉委員長指揮の下、早い時期から体制づくりに取り組み、昨年末には編纂室が開室し、4月には4人のスタッフ全員が揃う見通しとなった。

金沢大学の歴史は、金沢医科大学の前身である養成所を起点とすると、今年で130年に及ぶ。昭和24年新制金沢大学として発足するまで、石川師範学校、第四高等学校、金沢医学専門学校、金沢高等工業学校などの輝かしい前史がある。どこまで遡れるか限界はあるが、金沢の近代史と共にこれらを取り込んでこそ50年史の価値が高まると思われる。

本学創立50周年記念事業の趣旨は、単なる回顧のための事業ではなく、21世紀に金沢大学が目指す出発点となるべきものと位置づけ、事業テーマとして1)50年の歴史の検証、2)総合大学にふさわしい金沢大学の在り方の探求、3)地域社会への貢献、4)国際社会への貢献、を挙げている。金沢大学50年の歴史とその前史は、高等教育と学術・文化の発展の歴史であり、これらがその時代においてどのような役割を果たしたか、総合大学として地域・国際社会にどう貢献したか、といった視点が重要と思われる。

その意味で、金沢大学50年史編纂事業が本記念事業の中で果たす役割は極めて大きい。

## 50年史編纂室

### 室員自己紹介



谷本宗生

MUNEO TANIMOTO

性格：あまり小さなことにはこだわらない。  
モットー：インパクトのある人生を！  
今望むもの：計画を進めるためのパワー！！

1月1日付けで50年史編纂室の専任スタッフになりました谷本宗生です。研究分野は、近代日本の大学教育・研究史です。今までは、大学の年史編纂を一研究者として考察してきましたが、これから金沢大学50年史編纂に実際に携わることができ、大変光栄です。

年史編纂に当たって、できる限りの努力を尽くしたいと考えていますが、皆様方の御支援や御協力をいただければ誠に幸いです。どうぞよろしく申し上げます。



佐藤ゆかり

YUKARI SATO

性格：よく笑う方だと思います。  
好きな言葉：一期一会  
趣味：スキー(今シーズンは、まだ一度も行って  
いないので、雪を見るのが辛い)

50年史編纂室が設置された12月16日からスタッフとして働かせてもらっている佐藤ゆかりです。

学生時代はアフリカに魅了されてしまい、来る日も来る日もアフリカのことばかり考えていました。そんなわけで！？・年史編纂に関しては全くの素人です。そんな私が先生方のお手伝いをどこまでできるかわかりませんが、持ち前の根気とガッツでがんばろうと思います。どうぞよろしく申し上げます。

今回は、『金沢大学  
事務通報』第1巻第2  
号3月号(昭和25年)  
に掲載された渡辺四郎  
学生部長の巻頭言を御  
紹介します。



教育制度の改革が終戦後の悪条件の中に行われたため、大学事務職員が、新しい法規による機構整備や事務処理を軌道に乗せることに多くの苦心と研究を要し、相互に緊密な連絡をとり、協力し合い、理解し合うことの必要を痛感する時にあたり、事務通報が発行されたことは、時宜に適した企として、洵に喜にたえない。この通報が事務連絡の円滑化、事務能率の向上に寄与し、巻を重ねると共に大学の進展に多くの貢献をなすであろうことを確信するものである。

大学の事務職員が瞬時も忘れてはならないことは、各自の職場が教育の場、即ち教官の授業や研修と学生の修学とに密接に繋つておるといことである。憲法で武備の放棄を宣言した日本が、これから立つて行く途は、唯民主的な文化国家建設あるのみである。而して文化の開発、発展の基盤は大学にあることは言を要しないところである。即ち、大学の目的

は学校教育法第五十二条に、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」と明示してあり、換言すれば、大学は、学生に対し学術の優れた知識と方法とを授け、専門的訓練によつて、学生に世界の仕事に参加する準備をなさしめ、又将来の職業的訓練又は大学院における更に進んだ研究のための基礎を与える等知的陶冶を図ると共に、更に社会的、道徳的、精神的、身体的発達を助長し、民主主義社会において有力な役割を果し得る能力を涵養する使命を有するのである。この目的を達成するために、教官は極めて困難な仕事と、絶えざる自己犠牲と、教授内容を改善するための不断の研究をしなければならないのである。併し教官が如何に渾身の力を傾けても、事務職員が大学の目的を理解せず、教官の研鑽に協調を欠き、誠意と熱心とを失うにおいては、決して教育の場や研究の場の伸長を期することは出来ない。事務職員が記録簿や帳簿に記入する一字でも、弾く算盤の玉一つでも、教育、研修の場と脈絡相通ずることの責任を忘れず、且つそれに大きな誇りと名誉とを感じつつ、大学の使命達成のため、最善の努力を致されんことを切望して止まない次第である。

## 50年史編纂室

## 日誌抄録

(平成8年7月～平成9年2月)

年月日	内容
8. 7.30	金沢大学50年史編纂委員会(第1回) 開催
9. 6	金沢大学50年史編纂委員会(第2回) 開催
10. 3	金沢大学50年史編纂委員会(第3回) 開催
10.24	金沢大学50年史編纂委員会(第4回) 開催
11.11	金沢大学創立50周年記念展示実行委員会(第1回) 開催
11.14	金沢大学50年史編纂委員会(第5回) 開催
12. 5	金沢大学50年史編纂委員会(第6回) 開催
12.16	金沢大学50年史編纂室 発足
12.16	佐藤ゆかり室員50年史編纂室 着任
9. 1. 1	谷本宗生助手50年史編纂室 着任
1. 8	金沢大学創立50周年記念展示実行委員会(第2回) 開催
1. 9	金沢大学50年史編纂委員会(第7回) 開催
1.13	財団法人大倉精神文化研究所付属図書館より資料寄贈
1.14	財団法人野間教育研究所より資料寄贈
1.22	旧制高等学校記念館より資料寄贈
1.23	東海大学資料室より資料寄贈
1.27	寺崎昌男氏(現立教大学教授)来沢 「大学史研究会」開催
2. 6	『金沢大学事務通報』マイクロフィルム化 開始
2. 7	医学部所蔵資料の確認調査(第1回)
2.10	長野栄俊室員・松岡信一郎室員50年史編纂室 着任



理学部50年史  
編集委員長  
本浄 高治  
(理学部教授)

金沢大学は、御存じのように、平成11年(1999)5月31日には、北陸随一の総合大学として創立50周年を迎えます。その記念事業の一つに「金沢大学50年史」編纂が企画され、昨年の7月頃、和田学部長から理学部の代表委員として私が適任者と考えられるので推薦したいとの電話がありました。学部長は、その一年ほど前に、たまたま私が化学科長のときに、編集委員長の立場で、化学教室編集幹事(猪俣勝彦、中西 孝)及び職員一同、同窓会長(上原 章)の協力を得て、平成7年(1995)10月に、「金沢大学理学部 化学教室のあゆみ 1949~1995」を刊行したことを思い出されたのでしょうか。

委員をお引き受けし、第1回の全学の50年史編集委員会が、平成8年(1996)7月30日(火)に事務局で開かれ、出席して橋本委員長からの説明をお聞きしたものの、3年計画の大変な事業であることが分かりました。

この計画をスムーズに進めるために、その席上で配布された資料を学部会でも紹介し、各学科1名(附属施設はオブザーバー)で構成する「金沢大学理学部50年史編集委員会(仮称)」の設置をお願いし、了承されました。

これを受けて、第1回の委員会を平成8年(1996)9月26日(木)15時に理学部会議室で開催し、委員会の正式名称は、「金沢大学理学部50年史編集委員会」、委員長は、全学の編纂委員である本浄が務めることになりました。

委員会の構成は、数学科(古田孝臣、石本浩康)、物理学科(河田脩二)、化学科(中西 孝)、生物学科(星名 哲)、地球学科(大村明雄)、計算科学科(樋渡保秋)の委員と寺井事務長補佐(庶務係長、会計係長、学生係長を含む)からなり、今後の進め方について、50年史の内容、日程、資料収集と保管、事務担当の役割などについてフリートークしました。現在会議は、事務局での全学での委員会に呼応して5回開催され、委員の皆さんの協力を得て、目次及び年表の作成に取りかかっているとところです。



50年史に関するユニークな川柳を募集しています。

大学も  
五十年迎えて  
反省期

(Y・I)

今号の川柳

## 編集後記

創刊号は岡田学長や江見先生、本浄先生に原稿を執筆していただきました。とてもお忙しい中で、快く承諾していただいて本当に感謝しています。これから多くの方々に原稿をお願いすることになるかと思いますが、どうか御協力をお願いします。

また、50年史編纂に関する情報がありましたら、同編纂室まで御連絡ください。小さいことの積み重ねが年史編纂を可能にすると考えています。

50年史編纂室：本部棟6階， 64 5284・5288